

## 心身障害児(者)のためのボランティア活動

# 療育援助

心身に障害のある人とのかけわりを通して ボランティアの心を育み、すべての人々が 共に良い人生を送れる社会づくりをおこなう

平成30(2018)年5月10日発行

●発行人 社会福祉法人 あさみどりの会

No.520

〒464-0027 名古屋市中種区新池町1-18-2 TEL: (052) 782-2233 FAX:782-3513

(ホームページ)

あさみどりの会

検索

(メール)

asamidori@asamidori.net (4月から変更)

## 「つぼみの会」と自閉症児・者とあさみどり ～ 創立50周年おめでとうございます ～

愛知県自閉症協会・つぼみの会(以下、つぼみの会)が昨年5月に、創立50周年を迎えられました。つぼみの会は平成24(2012)年に特定非営利活動法人(NPO法人)となり、愛知県・名古屋市の行政や発達障害者支援センターと協力して、会の目的である自閉症児者と家族の幸せ、自閉症の正しい理解と啓発に向けて積極的に活動してまいりますので、この紙面では少し違った視点でつぼみの会の50年の歩みをあさみどりの会との関わりの中から眺めてみようと思います。

### 「つぼみの会」の名づけ親は堀要先生

つぼみの会は昭和42(1967)年5月14日に名古屋自閉症親の会(会員40名)として発足、初代会長は(故)塚崎映子さんでした。

会発足前、昭和41年に「つぼみ」(発足後は会の機関誌)が文集という形で発行されました。名古屋大学精神科児童部の(故)石井高明医師(元石井クリニック院長)とソーシャルワーカーの金子寿子さんが世話を務めて、B5判41ページに名大精神科を受診している18人の自閉症児の親(驚くことは全員実名)、医師・研究者3人、大阪自閉症親の会の代表が、文を寄せています。

その巻頭言は、児童精神科医の(故)堀要先生です。昭和39年に名古屋大学精神科教授に就任、自閉症研究の基礎を築いた方で、昭和47年にあさみどりの会が社会福祉法人設立した時の初代理事長でもあった方です。

### 巻頭言 堀 要

「かたいつぼみよ。なぜほころびてくれないのか、とざされ  
たつぼみの中に、もう花びらが用意されているはづだのに。」

私が児童精神医学に志した頃には、私にとって唯一つの参考書であったホソグルゲルの児童精神病理学という書物の中には、幼児自閉症という病気が書かれています。昭和十三年十四年、ヨーロッパの児童精神医学会を視察した時、私はどこでもこの病気について何も聞く事もできませんでした。しかしちょうどその頃、八事少年寮に収容せられている五・六才のケンちゃんという男子がありました。利巧そうな顔立ちのとのつた、奇妙な動作をする、ひとりニツコリすることはあ



在りし日の堀要先生



「つぼみ」創刊号 巻頭言

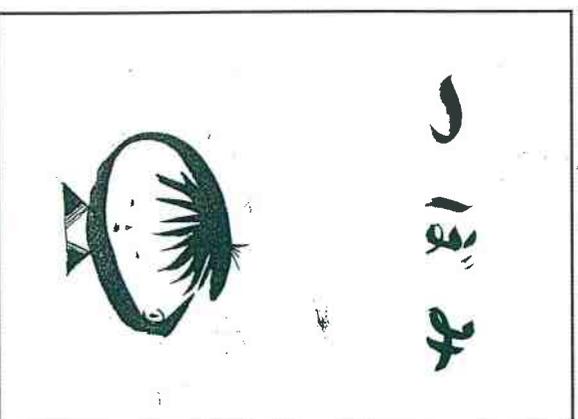
々と追加発表が行われるようになり、現在の日本児童精神医学会が生まれるきっかけとなったといえます。この学会で殆んど毎年何題かの研究発表が行われています。カナーのいう幼児自閉症（黒丸先生は最近の書物で幼児早発性自閉症といっている）とはこういうものだ、と診断を正確にしようとする研究上の努力が多くなされていきますが私共の仲間は、自閉症状を示す幼児を全般的にとりあげて、どうしたら自閉の壁をうちやぶることができるかとこれ等の不幸な子をもつ親のなやみやみとつけて苦労の多い研究をつづけているのです。もつと脳病的身体病的の研究から原因究明にまですすまなければならぬことあちこちで、世界のあちこちに呼応しながら次第に多方面に研究の手がひろげられていつています。親にとつては、あまりにも研究の進歩がおそすぎると思われるでしょう。研究者にとつては、十年のあゆみは、まだ研究がはじまっただばかりだといえるのです。そして私たち臨床家にとつては、この文集にみられるような親の皆様の日々の努力が大へんとおい教科書になるのです。よりよい治療のヒントを何とかさがし出したいとも心がけているのです。すでに三重からも大阪からも親の文集がだされているようですが、まだ多すぎはしません。親の皆様、お互いにも何かの役には立つことと信じます。」

（「つぼみ」創刊号より 昭和41年5月発行）

### つぼみの会発足会議演録（故堀要先生）より

また昭和42年5月14日、名大附属病院共済会館で行われた名古屋自閉症親の会（昭和43年愛知自閉症親の会に改名、昭和62年愛知自閉症児・者親の会、平成11年社団法人日本自閉症協会愛知県支部、平成20年愛知県自閉症協会、平成24年現在の名称に）発足式での堀要先生の講演より

「自閉症について、原因がわからない、本態もわかっていない。治療方法もわかっていない、と医学者は案外平気で申します事が、そういう子供をおもちの親御さんには大変な精神的な打撃を与える結果になつていくのではないかと、何とか治療方法、何とか教育方法をみつめていかなきゃならない、探していかなきゃならない、という構えで努力しているわけ、十亀先生も最初あすなる学園をひらき



「つぼみ」創刊号（昭和41年5月発行）  
（表紙カット 石井高明）

になった時に極端に言えば何にも御存知なかったわけで、唯むつかしい、治らん、という事だけしか御存知なかつたわけです。それをその子供と四つに取組んで今迄色々工夫をしてこられて結果はやはり世話をすれば世話しただけのこととは何かあらわれるという結果ができていますとお受け取り願っていいのではないかと、思うのでございます。そういう意味で一人の経験が大変貴重で皆さん方も子供さんで御苦労なさつて、しかし少しでも子供の発達に努力の結果役にたつという事をみつけたらお互いに知らせ合う、と、そしてそういう事を私共にも知らせて頂く、そういう事が非常に大切だという事をこゝで話し、皆さん方手をつないで努力して頂きたい。

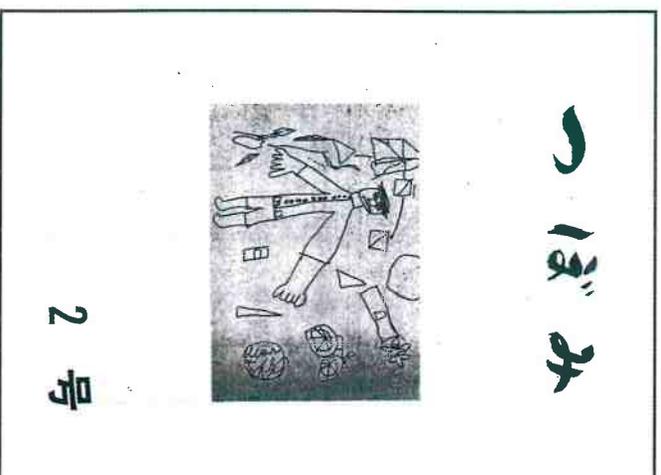
私共の方では少しばかり専門的な知識を多くもつておる、しかし十亀先生は別として他の私共は接触する時間は非常に少いわけでございます。親の方は二十四時間接しておる。しかし専門的な知識は充分でない。私共と親と接触するという事はもつているものをもちよつと足らないとこを補い合つて、ということですから一応は病気だろふと思うので、身体的な方面での研究が進むに従つてやはり特別の違いがあるということもわかり、治療方法もみつかつていくという事も段々あるだろうと思えますが、私共臨床にたざわつていゝる者は皆さんと同じ様に例え原因がわからなくても、例え治療法がわかかつていなくとも、今目の前にある子供を何とかしなければならぬ。そこで目の前に子供をおいた時、常に工夫、努力ということがあゝるわけであり、お互いに努力していきたくのでございます。

つぼみは必ずひらくのですが今の所かたぐ閉ざしておつて仲々ひらいてくれない。手で強引にひらければひらけましようが、それではバラバラにこわれてしまいます。本當の生きる力を尊重した上でどうしてこのつぼみをひらかせる事ができるか、これが毎日の私共の努力ではないか、と思うのです。… (後略) 」  
 (「つぼみ」 3号より 昭和42年8月発行 前出の巻頭言も含めて、旧仮名遣い、表記は原文のまま)

堀先生の巻頭言「かたいつぼみや、なげほころびてくれないのか」の一節が、「つぼみの会」の名称の由来となつたこと。始まつたばかりの日本の自閉症研究の現状と「親の日々の努力」を教えてもらふことが大変重要なことと書かれています。またもうひとつの講演(録)では、わからないことばかりだけれど、一人一人の経験をみんなで共有してことが大切で、そのために繋がつていくこと。そして障害の原因がわからなくとも、「目の前にいる子供(人)を何とかしていく」ことを話されています。

### 愛知県自閉症協会・つぼみの会 年表

昭和27 (1952)	わが国初の自閉症例報告
昭和41 (1966)	「つぼみ」創刊
昭和42 (1967)	東京において親の会発足
昭和43 (1968)	「名古屋自閉症親の会」発足 自閉症児・者親の会全国協議会発足
昭和45 (1970)	「愛知自閉症児親の会」に名称変更
昭和55 (1980)	「自閉症児の福祉対策について」「自閉症児の教育について」を県議会に請願、採択 「自閉症児者施設の設置について」を県議会に請願・採択
昭和61 (1986)	精神薄弱者厚生施設「泰山寮」開設 (社会福祉法人昭徳会)
昭和62 (1987)	「愛知自閉症児・者親の会」に名称変更
平成元年(1989)	社団法人日本自閉症協会設立 同協会愛知県支部となる
平成11 (1999)	「社団法人日本自閉症協会愛知県支部」に名称変更
平成16 (2004)	発達障害者支援法制度 (17年4月施行)
平成20 (2008)	「愛知県自閉症協会」に名称変更
平成24 (2012)	「特定非営利法人愛知県自閉症協会・つぼみの会」設立
平成28 (2016)	発達障害者支援法改正



「つぼみ」2号 (昭和41年12月発行)  
この号より本人の作品を表紙カッターに



## みなさんに支えられて はじめに

(塚崎 映子)

光陰矢の如しとかわねられますが、つぼみの会のお世話をさせてもらうようになって、20年の歳月が荒ただしく過ぎ去りました。この間、つぼみの会を取り巻く人々の中で育てられ、成長させていただき、人の命の尊厳さと、人の和の大切さ、人の心の温かさ等を身をもって体験できましたことに、先ず深く感謝しております。そして私は今、自分でやれるところまでやったという充実感と、力及ばず出来なかつたこと、密かに抱いていた新しい希望の渦等が交錯する中で、遅れ馳せながら残された余生をよりよく生きていきたいと思っています。

確かにこの20年の間に、専門分野はもとより社会の人々の障害者観も、社会福祉諸施策・諸施設の充実等についても格段の相違と発展があったと思います。しかし一方現代は情報化時代とか、科学革命時代とも言われるように、物質文明の発達の際で、人の心の優しさ、思いやり、ゆとり、豊かさに対する感性が少なく、美しい心証の育みが遅れ勝ちになっていることに心が痛みます。… (中略)

## 会ができるまでの家族

本曾の川面に映える花火大会を、孫が喜ぶものと期待して呼び寄せたのに、その音に怯え泣き叫ぶ姿に、どうしたのだろうと訝り、抱きしめていた実家の父も、子どもが二歳半の時他界しました。舅は幼稚園も小学校も受け入れられない孫が不意で、近所の子供さんを度々家に招き、お話ししたり、遊びの指導をしたりしてくれましたが、34年の春、最後まで孫の名を呼び続けて亡くなりました。二人の祖父共、どんなにかと心が痛みました。

その後40年頃まで、舅の教え子だった名古屋手をつなぐ親の会元会長山田さんがよく来宅され、社会の偏見を乗り越えて、挫折ずみんなで力を合わせ、役所に陳情したり社会の人々の理解や協力を求めるにはどうしたらよいか、又ボランティアを育成し、広く障害児の社会啓発に専念してみえたあさみどりの会を紹介していただいたりして励まして下さいました。手をつなぐ親の会研修会で勉強したり、各大病院精神科児童部の諸先生から、当時一番適切だと思われた治療と、ご厚情溢れるご指導を受けつつ、子どもの最も療育困難な思春期を家庭と病院を往復しながら家族で頑張りました。

## つぼみの会創成期

昭和41年、自閉児を抱え子どもが行く末を想い悩んだある母と子の心中未遂事件があり、裁判の結果執行猶予となりました。その時、もしすでに親の会があり、お互いに励まし合っていたならば防ぎ得たかもしれないなかつたとの思いと、又、同年愛知県心身障害者コロニー建設計画が報道されたこと、この二つが親の会作りの強い動機となったと思います。

どうか自閉児治療と研究の拠点をつくっていただきたい、それには保護者の団結が必要だと、先ず名大病院で知り合った方のお家を訪問し、話し合いを重ねました。そして名大病院精神科児童部の石井先生(当時)、金子先生のご指導により、41年9月、29名で準備会が開かれ、会設立の意志を確認しました。翌42年5月14日、正式に名古屋自閉児親の会が他県の方も含む40名で発足しました。その後、各県毎に親の会設立の動きがあり、44年総会において『愛知自閉症親の会』と改名しました。

今は亡き堀要先生から、会誌『つぼみ』創刊号の巻頭言に“つぼみは固いが何時か花開き実を結ぶ時が来るであろう”との想いをお寄せいただきましたので、会誌も『つぼみ』と命名され、会の別名も『つぼみの会』と呼称することになりました。… (中略)

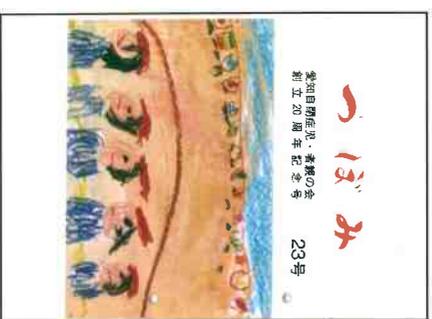
## 治療教育の場がほしい

昭和42～44年頃は、早期集団教育が必要と言われても、殆どの幼稚園・保育園で受入れを拒否されました。病気の子は治療が必要とされていたようです。つぼみの会では止むなく白金児童館や、千種保健所の一室を借り、あさみどりの会からボランティアの方々の応援を受け、子どもたちの集団遊びを始めました。親は子どもの療育について、保健所の担当係の人を交えて別室で懇談会を持ち、心の支えを得ることができました。(この試みは後で記します民間レベルで社会福祉法人あさみどりの会、さわりび園へと発展しました。)

「社会福祉法人あさみどりの会」が行き場のない在宅幼児のために、みこころ教会の一室を借りて始められた障害幼児の通園の場は、保護者は言うに及ばず、社会の方々の絶大な支援の下に、現在のさわらび園として十余年の歩みを続け、何百人という子どもと親の育ちの場として発展しています。始めの頃お世話になった子の大半が自閉症児であり、遠くは田原町、蒲郡市、西尾市、海部郡からも早期集団療育の場を求めて通って来られたのです。

他に講習会、映画会、心身障害児の問題を考えるシンポジウムとか、在宅者の年末訪問に、又、家庭訪問員を派遣していただく等、あさみどりの会には数々のご指導を受けました。

（「つぼみ」23号 昭和62年3月発行 愛知自閉症児・者親の会創立20周年 記念号より）



「つぼみ」23号 (昭和62年3月発行)

最近はつぼみの会だけでなく全国の親の会では、若い人たちを中心に入会される人が激減していると聞きます。塚崎さんが30年前に書かれている文章を今の時代に照らし合わせても、ほとんど変わらない状況だと感じます。本当に社会の障害に対する周知や認知、社会福祉制度、施設や福祉サービスの想像も出来ないくらい充実してきました。しかし、現代社会の中で、人の関わりそのものが希薄になり、福祉サービスの充実により、本来積み上げていく必要がある人（家族（家庭）の力はつきにくい状況になっているように感じます。そういう意味では、今まで以上に（顔の見える）当事者同士のつながりが必要になることは間違いありません。今回、つぼみの会からお借りしました当時の貴重な資料等のほんの一部ですが、紹介させていただきます。自分たちの取り組み（実践）をまとめる事、残していく事の大切さも改めて考える機会となりました。

最後にあさみどりの会島崎顧問とつぼみの会副会長でべにじだの家の利用者（生活介護、グループホーム）の家族でもある岡田ひろみさんの寄稿をご紹介します。

## 自閉症の人々とあさみどりの会

あさみどりの会顧問 島崎 春樹

### つぼみの会との出会い — 東別院青少年会館にて—

つぼみの会と言えばまず塚崎映子（あきこ）さんの名前と小柄な身体と笑顔が浮かんできます。私が岐阜県から名古屋に来たのが1968年、東別院青少年会館が開館してすぐ現われたのが、あさみどりの会という市民グループを率いる伊藤方文先生（58才）でした。そして間もなく伊藤先生に紹介されたのが、名古屋手をつなぐ親の会の事務局長加藤奈々枝さん、そして前年に発足したつぼみの会（愛知自閉症児親の会）会長の塚崎映子さんでした。

私（34才）は会館の事業部主任という立場で、職員の中で唯一福祉事業の経験があるということとで、福祉関係者の対応は全部私へ廻されてのご縁でした。ちなみに私は会館の出来る前の6年間岐阜県の児童養護施設の児童指導員を職業としていました。

私が青少年会館を希望した動機は、社会教育の中でも特に青少年教育を、学校のような縛りのない場所で自由に実践することでした。

館長は名古屋市の図書館長を定年1年前に退職して招かれた人（54才）で、社会教育に造詣が深く、私を連れて市役所をはじめ各図書館、各新聞社、テレビ局、劇団などを廻って頂き、又童話協会会長、児童文学者、名古屋大学をはじめ各大学の教授など、巾広い人脈に私を紹介して頂き、その中にあさみどりの会の伊藤方文先生がありました。

私の事業部主任席の横に大きなソファを置いて貰い、青少年の相談にいつでも対応出来るようにしております。青少年は日曜と夜にやってみますので、昼間は空いていることが多いのですが、伊藤先生の紹介もあって、障害児のお母さんたちがよくみえるようになりました。その中でもよく来て話込んでいかれるのが塚崎さんでした。

そして私が会館に赴任して4年目(1971年)頃から塚崎さんが頻繁に来られるようになり、翌年の自閉症児親の会全国大会の会場が当会館に決まっていたこともあって、大会を成功させるためのボランティアの動員等の相談もありますが、私に自閉症児がどういう子どもか、そして子どもの置かれている状況を伝えようとしておられたのだと思います。

私の仕事のメインは青年教育で、青年講座、ボランティア研修会、レクリエーション研修会、仏教青年会をはじめ青年のサークル活動の助言、支援などに全力で取り組んでいました。子ども会、ボーイスカウト、剣道教室など子どもの活動は他の職員に任せていました。

1972年10月8日(日)第3回自閉症児親の会全国大会には、上記の青年活動のメンバーから150人余をボランティアとして動員し、近くの松原小学校を借りて、大会参加者の子どもの手をして貰いました。

私は会場を知り尽くしていることもあって、準備から大会日の進行などのお手伝いをしていました。

ボランティアとして協力してくれた青年のほとんどが、自閉症児と対面するのが始めてで、後の報告会で皆がロクに驚きの体験を語っていました。止めても止めても水道栓をひねる子、ピョンピョン飛んではかりい子、無意味に走りまわっている子、同じことばかりしゃべっている子など、どう対応していいかわからず、見失わないようにするのが精一杯であったと。

こうしたご縁が重なって、青年ボランティアの育成と派遣、催し物の共催、後援などを通して、あさみどりの会と深く関わるようになり、1975年41才の時、招かれてさわらび園々長を引き受けることになりました。



「つばみ」99号(昭和48年2月発行)

### つばみの会の推薦で生まれたさわらび福祉園

1979年1月27日の晩(39年前の手帳より)、私は伊藤先生宅に呼ばれて行ってみると、そこに塚崎映子さんが居られ、三好町から通所授産施設を作ってほしいという話があると告げられました。三好町！私は全くなじみのない町で、町の人口規模も何もわからないまま、伊藤先生と塚崎さんは町が土地を提供するからぜひにという話だからと、熱く語られるのを只聞いていた事を覚えています。この時、同年8月に伊藤先生が死去されることになるとは思いませんでした。

東名古屋病院に最後に見舞いに行った時、「映画の完成と授産施設のことをたのむ」と苦しい息遣いの中で言われ、これはしつかりやらなければと強く思ったのですが、両方共企画に入ったばかり、資金のめども全くたっていないと、前途多難な重い気持ちでもありました。

2年後国際障害者年に合わせて映画「コミュニケーションへの道」は、完成後「そつちやない、こつちや」と名づけて発表したのですが、製作費2100万円のうち600万円赤字が残りました。

三好町の授産施設は地域住民の猛烈な反対運動があり、交渉は13回に及ぶという困難な経験をしましたが、伊藤先生が亡くなられて3年目に完成し、苦しかったけれど伊藤先生の二つの遺言を何とか果たせたという安堵感がありました。そして私はこの間しつかり鍛えられ、事業運営への力をつけさせて頂いた期間でもありました。



自閉症と呼ばれる  
ユニークな人々との出会い

最初は「あさみどりの会」が自閉症児の  
全国大会を通じて開催された。その  
会場は、自閉症児の保護者や関係者  
の集まる場所として、自閉症児の  
生活や学習の様子を撮影している  
。また、自閉症児の生活の様子を  
撮影している。また、自閉症児の  
生活の様子を撮影している。また、  
自閉症児の生活の様子を撮影して  
いる。また、自閉症児の生活の様  
子を撮影している。また、自閉症  
児の生活の様子を撮影している。

そもそも授産施設設置を三好町へ強く要望されていたのは三好町親の会の方々だったのですが、そのリーダーだった鈴木睦子さんは、聖心教会の療育に通っていた方で、つぼみの会会員で塚崎さんとも親しく、そうしたご縁もあつて誘致する法人はあさみどりの会で、ということになったのではないかと思います。かくして難産の未開設した通所授産施設「わらび福祉園」に、多数の自閉症者が入園してきました。早速見に来られた塚崎さん曰く、「みんなつぼみの会でも大関、横綱級の人ばかりなので、オネガイシヤス」と。

### 自閉症児とあさみどりの会ボランティア

あさみどりの会の初期のボランティア活動の舞台の一つが、名大医学部のプレールームで、石井高明先生らの指導のもと参加した自閉症児の療育です。その後つぼみの会の行事や日曜学校など、毎月のようにボランティアを派遣して来ました。

また個人ボランティアの事例を紹介しますと、発足して間もないつぼみの会は、相談する所を求めて多くの会員が集まり、運動体として大きく動き始めてい



つぼみ20号 (昭和59年3月)

したので、会長の塚崎映子さんは多忙を極め、特に日曜日には会議や行事も多いので、娘さんのY子さん（器物破壊など行動障害の激しいタイプの自閉症者）をあさみどりの会のボランティアサークルの中から、屈強のボランティアの太田君に担当して貰う事になりました。

毎週太田君の日曜日は「Y子さんと一緒」の日々が続きました。喫茶店で大声を出したり、よその玄関先の植木鉢を蹴つ飛ばして割ったりと数々の問題行動に付き合ひ、トイレでオシッコや水滴が一滴でもパンツにつくとすぐ脱いでしまうので、太田君の上衣のポケットにはいつもY子さんのパンツが2〜3枚入っていました。ちなみに10年後太田君はわらび福祉園の職員になりました。

渡辺君はボランティアから職員になった人ですが、職員になってからも休日は両親がお店をやっておられるH本君（重度自閉症）のボランティアをしております。

彼女とデートする時も車の後部座席にはH本君が乗っていて、3人づれのデートの時期がしばらく続きました。

あさみどりの会は、糸賀一雄先生の「気付いた者が責任者」の考え方を大切にし、「いま、ここで」困っている人に、何か出来ることはないかを探り、実践してきました。

### あさみどりの会は自閉症のメッカ

あさみどりの会の初期は、映画製作と上映会、機関紙や出版物の発行・頒布、講演会・シンポジウムの開催など、専ら障害児者への社会の理解を深めるための啓発活動を行っていました。

そのうち、障害児の親たちの制度の枠からはみ出して支援を受ける場がなく困っているという相談が多くなり、「気付いた者が責任者」の立場で、聖心（みこころ）教会で集団療育を始めたのが、直接処遇実践の始まりで、その利用児の多くが“動く障害児”つまり自閉症児だったので。そして通園施設、通所授産施設、入所更生施設と事業所が増えしていくに従って、“強度行動障害

と言われるような対応に困っている自閉症はあさみどりへ”というような風潮があったのかなかったのか、とにかく重度自閉症の人が多く来られるようになりました。

つぼみの会は1980年12月、愛知県議会に「自閉症児者施設の設置について」請願を行い、採択されました。その後、1983年、「自閉症児（者）調査研究会議」が設置され、具体的にど

んな施設を作ったら良いかについても話し合われました。

メンバーは石井高明先生を班長に、つばみの会々長の塚崎さん、施設の代表で舟橋先生と島嶼、県中央児童相談所長、精神薄弱者更生相談所長、県民生部主幹の7名で、会議は1983年6月から10月までに、三重県の“あすなる学園”“あさけ学園”の視察を含めて7回開催されました。県としての目標は、自閉症児者を一定期間入所させ、療育して問題行動や生活習慣を改善して、家(地域)へ戻すという設定でした。

会議で私はこれまでの経験や見聞を元に次の様な提案をした記憶があります(県が同年10月に出された報告書にも反映されていました)。

『まず利用者は問題行動を抱えた人が多いと思われるので、かなり濃密な個別対応が必要である。従って直接処遇職員(支援員)は、入所更生施設の基準の2倍は配置すること。』

利用者は療育効果と処遇上の安定を図ることを考えると、自閉症者の占める割合はおおむね60%位が望ましい(石井先生も同じ考えでした)。

敷地は10,000㎡は必要で、居住棟は基準の1.5~2倍、又は小舎制とし、作業室はやや離れた場所の別棟とする。管理棟には相談室、研修室、研究所を設け、宿泊棟も作り、実習生、保護者、他施設職員、教員などの宿泊研修に対応する。そして農場や小牧場も…。

研究所には非常勤の医学、心理学、教育学、社会学の諸分野などの研究者を配置し、実践現場と直結して自閉症に特化した研究所のある施設として、ここに来れば自閉症児(者)支援のノウハウは元より、学際的にも現時点での自閉症に関する情報の全てが揃って、上記諸研修や相談に対応出来る場所にする。などなど…。』

運営を依頼する法人案の一番上にあさみどりの会の名が最初はあったのですが、いつの間にか消えていて、多額の予算を必要とする私の提案が影響したのかどうか…。県下でも体力のある大法人に決まり、施設長は県の大物OBが来られ、施設は普通の入所更生施設の基準通りで良いということになり、「泰山寮」(1986年)が生まれたのです。

結果は「自閉症児(者)調査研究会」の報告書の中身はほとんど無視されたことになりました。県議会でも通ったから、調査し、会議も行い、施設も作りました。という“目に見える実績だけ残せばいい”という、利用する生身の人間の扱いに対する行政の冷たさに、怖さと淋しさを覚えました。それから10年後に、名古屋市の要請で「べにすだの家」を作ることになりました。その時、あの時の会議での話し合いやその後の経過の残像が心の中にあって、財政的には困難であっても、あの時画いた理想に少しでも近いものになりたいと考えました。

当初の支援者の配置は措置費(当時)では賄えない分をボランティア(昼・夜)と、保護者(母親)に作業や泊まり当番もお願いし、職員のボランティアで日中も夜も基準の2倍の支援者を配置し、個別化を実施しました。そして利用者の自立状況に応じて、5か年かけて徐々に支援者の人数を減らしていく取り組みもしました。この取り組みにも行政から強力な圧力がありました。

建物は当時の基準の1.5倍にし、施設はなし、研修室や地域交流スペースなどを設け、施設全体を出入り自由な開放的な造りにしました。作業室は徒歩15分の借家で、職住分離を実施するなど数々の実験的取り組みを行いました。

利用者は強度行動障害に該当する人13名、重症心身障害の人6名を含め、想像を超える重度者の施設となりました。15年かかりましたが、入所から80%をグループホームに移行し、ほんの少し夢の実現に近づけたかな…と。しかし問題行動への対応に関する悩みは絶えませんので、常に精神科医、臨床心理学者などの助言を頂きながら実践してきました。

現在あさみどりの会の利用者(通園、通所、入所、グループホーム)300名余のうち、区分3以上の自閉症児者の割合は48.7%です。

あさみどりの会は聖心教会での幼児療育から49年間、利用者約50%の自閉症の人と共に歩んだ年月でありました。そして常につばみの会とも連携してきた51年間でした。

# つぼみの会50周年を迎えて ～息子と共に、つぼみの会と共に歩んだ年月～

愛知県自閉症協会 副理事長 岡田 ひろみ

平成29年5月、つぼみの会は創立50周年を迎えることが出来ました。これもひとえに会員の皆さま、ご支援いただいています皆様のお陰と心より感謝いたします。その記念事業として「創立50周年記念会報」「50周年記念NHK厚生文化事業団フォーラム」「つぼみ音楽フェスティバル」を行うことができました。

## 宮崎時代 ～太一の保育園探し～

私自身がつぼみの会に入会して38年になります。そのきっかけは、息子の保育園探しでした。昭和49年生まれの息子が1歳半になった時、宮崎県に転勤しました。引越した先は、窓を開けると牛の声が聞こえ、山からはコジュケイ（小縷鶏）の鳴き声が聞こえるのんびりした場所でした。それまで一度も、名古屋から他に出たことがない私にはかなりのカルチャーショックでした。

それまで普通の子だと思っていた息子が、2歳を過ぎて、出ていた言葉が消えてなくなり、名前を呼んでも私の方に来ないなどの状況が出てきました。他にもいろいろとあったかと思いますが、家の中で昼間二人きりで過ごしていましたので、息子の発達の遅れに気付くことはありませんでした。

3歳になって保育所に入ることになり、入園式の日から驚きの連続で、オルガンの上を立ち歩く、椅子に座ることができず、うるうるして最後は部屋の隅のロッカーの上に乗って座っていました。入園1週間で集団での指示に従えないので、お世話をすることはできないと退園を告げられました。

この時の辛い思いは、今でも強く記憶に残っています。名古屋から手伝いに来ていた母に泣き顔を見せたくないので、息子の手を引いて遠回りして帰りました。弟を出産したばかりで知り合いも少ないところで、保育園に行けなくなり、他に行くところがありません。市役所にお願ひに行き、偶然、もう一人一緒に入園した落ち着きのない二人の子供に、なんとか加配の先生を付けてもらうことが決まり、人数の少ない町の中心から外れた保育園に転園しました。加配の保育士さんは一生懸命二人に接してくれましたが、その方法は手探りの状況が続いていました。

その後、宮崎市に保育士研修に来られた講師の方のご縁で、前日から飛行機に乗って福岡県久留米大学医学部附属病院小児科発達クリニックで、二人とも4歳過ぎに「自閉的傾向」の診断をもらいました。住んでいた市で初めて診断がおりた「自閉症」児でした。私は息子に診断は出ましたが、障害という意識はなく、いつか良くなるのではないかと思っていました。その後、発達クリニック主催の大大で開かれる3泊4日の療育キャンプに1年に2～3回参加していました。



## 再び名古屋に戻って ～塚崎さんとの出会い～

宮崎県でも親の会を作りたいと、親たちで話し合いを始めていましたが、年長児になる前に名古屋に戻ることが決まり、保育園の受入れ状況などが分からず困りました。旦那が出張で、名古屋に行く際に、通う先を探すことにして、尋ねたのがつぼみの会・初代会長の塚崎映子さんでした。

直ぐに、塚崎さんは自閉症児を受け入れていた幼稚園、保育園を紹介して下さい、わざわざ一緒に園まで付き添って下さいました。息子の様子も知らなまま、受け入れてもよいとの返事をいた

だくことができたのは塚崎さんのお陰です。当時は自閉症の子供を受け入れている園がとてもなく、そのことで本当にありがたく、どんなに安心できたか、その時の塚崎さんにしていただいたことと、その時の感謝の思いは38年以上過ぎてても忘れることができません。残念ながら、父親の勤務地の都合もあって、その紹介いただいた園ではありませんでしたが、名古屋での保育園が決まり戻って直ぐ、つぼみの会に入会しました。その頃の塚崎さんは、いつもときばきと動かれていて、私にとっては雲の上の存在のような方でした。

当時は、自閉症の講演や情報も少なく、関連図書もほとんどない状況でした。つぼみの会の主催の講演会や茶話会に参加して、自分たちが困っていることを先輩に話し、皆さんの経験などを教えていただいたこともたくさんありました。小学校中学校と特殊学級に、高等部は養護学校に進みました。団塊ジュニアの年代なので人数も多く、卒業後は人数が多い状況でしたが、お願いして中村小規模作業所に通うことが出来ました。

### つぼみの会の現在の動き ～平成4年に上前津に事務所を構えてからの体制～

つぼみの会が平成4年、上前津に事務所を構え、会の体制も新しくなっていました。ようやく世の中で自閉症に注目が集まりはじめ、会員も増えてきました。その中で今まで自分たちが足りないと感じていたもの、必要だと思っていたことを実際の行動に移すことをしました。若い人たちも参加して「音楽あそび」「体操あそび」「青年教室」等を始めました。平成9年に全国的にも早い段階で「高機能部」を立ち上げ、その年から、私は会の副会長として現在に至っています。12年に「父親部」を立ち上げるなど行ってきました。平成15年には愛知県に発達障害者支援センターが設置され、ついに17年4月に発達障害者支援法が施行されました。さらに会の体制も平成24年からはNPO法人として、愛知県・名古屋市の障害者施策審議会をはじめ発達障害者支援体制整備検討会等に参画して当事者団体としての意見・提言も発言させていただいています。

### 息子太一とべにしだの家（あさみどり）

息子は21歳で「べにしだの家」開所と同時に、通所で利用していました。開所したばかりは多くの方がそうでしたが、慣れない場所、慣れない職員、障害特性の偏食、過敏性、変化に弱い等落ちつかない日々でした。てんかん発作もあり、高いところ上がる、他害、自傷もあり私自身が大不安で、落ち着かないべにしだの家でのスタートでした。当初は母親・父親の出番（役割）も多く他の利用者や親たちとの関わりで、他の施設にはない濃い関係を築くことができました。



15年過ぎてから、ショートステイの利用を始めたところ、私の突然の骨折、入院生活があり、息子にとって体験を目的としたショートステイが急にロングステイになりました。私が想像していた以上に、本人が落ちついて生活できていると聞いて、これまでの生活や経験で息子も成長していると思えて、今まで関わっていたいた皆さんに感謝したい気持ちでした。

それから、しばらくして「グループホーム」と声をかけていたときは、少し不安もありましたが、安心して送り出せました。日中の生活介護、グループホームでの生活を本当に多くの支援して下さる方々のお陰で成長を感じることができ、今は「大人になったね」とうれしく思えます。

べにしだの家の親たちも高齢化が進み、親たちが安心して本人たちの権利擁護、身上監護を託していきたいと考えて成年後見法人「蒼の会」を立ち上げましたが、制度そのものを使いやすいものになっっていないのが残念で、今後も他機関と連携して活動を進めていきたいと思っています。

### さいごに

つばみの会で副理事長として活動し、多くの人の話を聞かせていただき相談を受けたりすることで、少しは息子を客観的に見ることができ、私も成長できたかなと思います。現在、発達障害の子どもを育てている親が研修を受けて、発達障害の診断を受けて間がない子どもたちの話を聞かせていただき、共感してアドバイスできることがあればアドバイスする「ペアレント・メンター活動」を私もしています。

「いいいの家」等で孫の年代の子どものお母さんと話をすることが多いですが、やはり悩んでいることは私たちの頃と同じで排泄の問題、偏食の事、言葉の事等です。私が先輩と話して安心できたように、若い人の話を聞くことでその方が安心できたらと思います。会員数の減少や、高齢化した親たち、行動障害のある人、大人の発達障害、次世代への繋ぎなど問題は山積していますが、全面的に応援してくれている家族に感謝しつつももう少しだけ頑張っていきたいと思っています。

「れいんぼう祭」 今年も開催します。皆様のお越しをお待ちしています。



**第16回**  
**れいんぼう祭**  
**平成30年5月27日(日)**  
**10時～15時(雨天決行)**

れいんぼうクラブスは、知的な障がいのある人たちが、その人の“しごと”を持ち、“生活する力”を習得し、地域社会の中で華やかな人生を送れることを目指しています。この機会に多くの方にお越しいただき、楽しい交流の場になればと思います。

送迎バス	入場券5枚
9:50	10:30
10:50	11:30
11:50	12:30
12:50	13:30
13:50	14:30
	15:30

※送迎のマイクロバスが、近鉄新当駅南口を出てすぐのロータリーから出ます。

#### Rゲーム

ハンズメイド雑貨、衣類、雑貨、日用品、園芸用品等

#### ゲーム

わが家、村等

#### 雑貨店

ゲーム、雑誌等、カラオケ、お花やしき、ライオンストア、リソグ雑誌、シューズ等

#### ライオンストア

- 10:30～ ちびっく
- 11:15～ 我楽重 (和木枝店等)
- 12:15～ ちびっくスズキヤルバンド
- 13:20～ Mojikoコンガ
- 14:20～ 抽選会開始

※抽選会には必ずお申し込みください。抽選会当日は抽選券を引換券にてお持ちください。抽選券は抽選会当日まで有効です。抽選券は抽選会当日まで有効です。抽選券は抽選会当日まで有効です。

#### ボランティアさん募集!!!!

当日、ボランティアでお手伝いして下さる方を募集しています。詳しくは下記のれいんぼうクラブまでご連絡下さい。

＜会場＞連絡先  
社会福祉法人 あさみどりの会  
れいんぼうクラブ

〒496-0913

愛知県愛西市西條町相之江119-1

TEL (0567) 33-2211 FAX (0567) 33-2212

Email : reibow@asamidori.net



送迎バス  
送迎バスは9時50分  
から15時30分まで  
運行します。

